

オレがプリキュアと幼
馴染だって？

チャキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡には2人の幼馴染がいた。ある日、幼馴染の2人がコスプレのような格好になった。それはプリキュアという伝説の戦士らしい。そんなプリキュア達と一緒に幸福のメロディを不幸のメロディに改ざんしようとしているマイナーランドの企みを阻止する為に、八幡はプリキュア達と一緒に戦うのであった。

ただの思いつきで書きました。

目次

第1話

—

1

第2話

—

15

第1話

突然だがオレは2人の友達がいる……いや……いた。幼い頃からの付き合いでまあ、所謂幼馴染というやつだった。だが今はそいつらとは関わりは無くなった。同じ中学に通っているが、話をしたことがない。こうなってから1年か。早いもんだな。それにしても見た感じあいつらはまだ仲直りしていないらしい。会う度に喧嘩ばかりしている。前まではオレが間に入ったりしていたが、ある日からオレはそれをしなくなった。というかアイツらがどうしてそうなったかというと、それは入学式の時にかしらのすれ違いがあったらしい。それで1年間犬猿の仲になってしまった。それでオレも何とかしよとしたけど無理と悟ってオレは2人と関わらなくなった。

さつきから言っている幼馴染というのは北条響と南野奏の2人だ。2人ともかなりの人気者だ。

まずは北条響。茶色の腰まで届くロングヘア。活発かつ元気な性格で負けず嫌いでもある。それに正義感も人一倍強くて、その正義感でオレは助けられたことがあった。

と言つても小学校の時に孤立しがちだったオレに話しかけてきたのだ。それにより必然的に南野とも関わるようになったな。それに寂しがり屋で涙脆い面もある。そんな北条だが運動神経抜群だが、運動自体が好きなため特定の部活に入らず、助っ人に徹底しているらしい。逆に勉強や料理が不得意である。そしてあいつの父親は署名な音楽家で、母親は有名なヴァイオリニストである。あ、後甘いものが好物。

次に南野奏。オリーブのような色をしたロングヘア。真面目で友人や教師からも頼りにされているが、人一倍頑張る努力家である。芯が強く、涙を見たことはあんまりないな。納得いかないことは譲らない一面もある。北条や南野の弟とかには怒りやすい。オレも何度が怒られたことがあったな。自ら大人しい性格とか言っているが、周りは怒らせると誰よりも怖いと言われている。確かに怒ると怖いんだよなあいつ。運動神経は低いけど、勉強と菓子作りは得意で、学校ではスイーツ部という部活に所属している。それに家はカップケーキショップを経営している。

……昔は良かったな、と思つてしまう事がある。けれどオレはもうアイツらと関わらなくなつたから、関係ないと思ひ込んでいる。

八幡「はあ…帰るか」

そう言つてオレは本をカバンにしまい教室を出た。

一方家庭科室では奏が所属しているスイーツ部が活動の真つ最中。できたスイーツを部員と一緒に食べるところに響がケーキをつまみ食いをしている所を奏が怒っている最中だった。

奏「勝手に食べるのはやめてっていつも言つてるでしょ」

響「どうせいつも余るんだから少しくらいいいじゃない。ケチ」

奏「ケチく!」

響「じゃなきや石頭だ」

奏「石頭…:ちやんも頼めば食べさせてあげるのに!」

響「あげるだつて。ほくらその上から目線。だから頼みたくないだよ」

奏「あつそ、じゃあ二度と食べに来ないで。だいたい響なんかにあげるケーキはここ
にないんだから」

響「響なんかー!」

するとスイーツ部の部員の1人が声をかける。

「ここらここら、あなた達。あんまり友達の事悪く言わないの。親しき仲にも礼儀ありつて言うでしょ」

響・奏「親しくなんかありません」

「あ、ハモった」

響・奏「……ふん！」

2人は同時にそっぽをむく。こういう風に2人は喧嘩ばかりしている。

響「あ……八幡」

奏「え？」

響の言葉に驚き奏は響の視線の先を見る。するとそこには2人の友達で幼馴染の比企谷八幡の姿があった。八幡は猫背のように丸くなり、気だるげのように歩いていて、それを見た2人の顔は見てわかるように暗くなってしまふ。そんな2人の視線の先を見るスイーツ部の部員達。そんな中1人が口を開いた。

「あ、比企谷君だ」

「え？ヒキタニ君じゃないの」

響・奏「ひ・き・が・や、よ!!」

2人は同時に大きな声で八幡の正しい苗字を言う。

「あ……そ、そうだったんだ。ごめん、気をつけるよ」

2人の劍幕に押されてしまうスイーツ部の部員。他の人達もさっきの声でびっくりしている様子だった。

「比企谷君って、前まで2人のどっちかと一緒にいる所見た事あるんだよね。でもいつからか一緒にいるところ見なくなったな」

「そうなんだ」

「奏と響て小さい頃は毎日一緒に遊んでたって聞いた事あったけど」

「え、ホント。意外、本当は仲良しだったしして」

そんな事言われた2人は一瞬さらに暗い顔になってしまう。そしてそんな空気から逃げるように響は家庭科室しから出ようとした。

奏「クリームくらい拭いたら」

そんな事言われた響は舌なめずりのように鼻付近についたクリームを舐めて家庭科室から出た。そして響出た後奏は小さいため息をついた。

「大丈夫？奏」

奏「え、あ、うん大丈夫」

「そう？響時とかそうだけど、比企谷君の時すごい暗い顔してたよ。なんかあった？もしかして比企谷君になんか酷い事言わたりしたの？」

奏「ち、違うよ！そんなんじゃないって！」

「本当に？」

奏「ホントホント」

そしてまた小さいため息をつく奏。響にはまた酷い事を言ってしまったと後悔をする。それに八幡に対しても後悔の気持ちもあつた。八幡は2人の仲をとりもとうとしてくれていた。

はあ…響には言い過ぎてしまったな。それに八幡。私は八幡に酷い事を言ってしまったっていた。それでも八幡は響と話し合おうと言ってくれていた。それなのに私は八幡の事酷い事を言い続けていた。そんなある日、八幡の口からこんな事を言われた。

八幡『……そうか……もう好きにしろ』

そう言つて私の元から去つてしまった。そしてそれから八幡とは関わりなくなつてしまった。八幡は酷い事を言つてた私に何も言わずに接してくれていたのに。それなのに私はそんな八幡の優しさに甘えていた。それでどうとう八幡は怒ってしまったのだらう。そう思いまた小さいため息をついた。

そして響の方は。

はあ……なんでもいつも喧嘩しちゃうんだろ。

響「私のバカ、バカ、バカ」

そう言いながら自分の頭を叩いていた。

響「はあ……」

それに八幡の事もだ。八幡は私に奏と話し合おうと言ってくれていた。私は思わず「八幡は奏の味方なの」とか言ってしまったたり、酷い事を言ってしまったことがある。それでも八幡は変わらず私に接してくれていた。そんな八幡の優しさに甘えて私は何度も八幡に酷い事を言ってしまった。そして八幡はある日こう言った。

八幡『……あつそ……もう勝手にしろ』

そう言って私の元から去ってしまった。それから八幡とは関わらなくなってしまった。私は八幡を怒らせてしまった。

響「はあ……昔は楽しかったな……」

八幡 side

八幡は街を適当にぶらついていた。なんも目的もなくただただ歩いていただけだった。そんな事していると時々、これ響が好きそうだなとか、これは奏に良さそうとか思ってしまう。けれどその気持ちをすぐに忘れようと振り払う。だが、そんな上手くい

くわけではなかった。そして八幡の足はあの場所へと向いていた。その場所というのは響、奏、そして八幡の3人の思い出の場所だった。八幡は気づいていないだけで、無意識だった。

あ、ここは…なんでオレまたここに来たんだ？もしかして無意識と言うやつか。今日だけじゃない。何度かこの場所に来ていた記憶がある。そして気づけば中へと足が動いていた。

響「喧嘩はもうたくさんだよ！」

奏「そっちのせいでしょ！このレコードの事覚えてないんだなんて」

ん？この声は…あの2人がいるのか？それにレコード…もしかしてあのレコードなのか。

響・奏「全然！」

今度はなんだ？大声出して。気がつくともオレは走っていた。そしてちよとした広場に着くとそこには、やはり響と奏がいたが、響に黒いネコが飛びかかろうとしており、奏

には奇妙な衣装に身を包んだ男達を取り囲み、そのうちの1人が手刀のように奏に襲いかかろうとしていた。オレは思わず叫んでしまっていた。

八幡「響！奏！危ない！」

響・奏「っ！はちま……！」

遅かった。響の胸に黒いネコの手があたり、奏の背中に男の手が刺さっていた。

その時、眩い光が光だしたのだ。一体なんなんだ？

響・奏「何？」

八幡「……なんともないのか？」

響「え、うん」

奏「大丈夫」

そっか……良かった。と胸を撫で下ろす。

黒ネコ「なぜ、奪えない」

ネコが喋った……もう一度言おう。ネコが喋った！きゃー！しゃべったー！と同じ

状況である。

「なんでかにや、もしかしてこの2人特別だったりするのかにや」

あのネコも喋るのかよ！というか次は白ネコかよ。

「音符みつけ！」

黒ネコ「真似するな！」

なんだか響と奏のような感じだな。

白ネコ「お先にや」

黒ネコ「させるか！いでよ！ネガトーン！」

黒ネコのひとつで声で周りは嫌な音のようなものが広がる。それは奏が持っていた物を自立で動き出したのだ。というかやはりあのレコードは！そんな事を思っているとコードは怪物へと変化したのだ。

「ネガトーン」

奏「やめて！そのレコードは！」

奏「にや？あのレコードがどうしたにや？」

八幡「あれは…あれは響と奏の思い出のレコードだ！」

思わずそう言ってしまう。

響・奏「八幡…」

響「八幡の言う通り、あのレコードは思い出のレコードなのよ」

奏「響」

そして怪物は黒ネコの指示により街に行こうとしていた。

響「あの大切なレコードを」

奏「あんな怪物にするなんて」

ん？

響・奏「絶対に許せない！」

その時、またあの眩い光が輝いた。さつきよりも強い光だ。すると2人の胸から音符のようなものが出てきたと思ったら、その音符が形を変えてハートのようなガラス細工のようなものに変化した。

響・奏「なにこれ？」

うん、だろうね。オレもわかっていない。

白ネコ「やっぱりそうにや！この2人は伝説の戦士、プリキュアにや！」

は？伝説の戦士？プリキュア？何言ってるんだあのネコ。わけがわからない。思考が追いつかない。だって、幼馴染の2人が伝説の戦士とか、プリキュアとか、なんだそれ？どこのラノベだよ。

白ネコ「2人で声を揃えてレッツプレイ、プリキュア、モジュレーション！つて叫ぶにや」

響・奏 「「え?」」

そりやそうなるよな。急にそんな事言われてもな。

白ネコ 「早く早く、あの怪物が街を襲う前に」

響 「レコードを取り返そう奏」

奏 「オツケイ響」

すると2人が持っていたガラス細工みたいなやつに宝石みたいなものはまる。

響・奏 「レッツプレイ!プリキュア!モジユレーション!」

そう2人が叫ぶと再び輝き始め、光が2人を包み込んだ。そんな輝きから出てきた2人の姿は変化していた。響は茶色だった髪が淡いピンクに変化し、髪型がツーサイドアップに変化し、ロングヘアから縦にロールしたツインテールに変わる。頭にはマゼンタ色のカチューシャをつけている。服もマゼンタ色で腹部が少し出た服に変化していた。

奏のほうは髪がオリーブのような色からレモンのような色に変化し、長いポニーテールへと変化していた。頭には白いカチューシャをつけている。服も白色に薄いピンクのようなラインが入った服になっていた。

響 「爪弾くはあらゆる調べ!キュアメロディ!」

奏「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

響・奏「届け！2人の組曲！スイートプリキュア！」

正直夢であつて欲しいと思いたい。夢ならば覚めて欲しい。目の前で幼馴染が変な姿に変化した上に謎の怪物と戦闘を始めた。何がどうなっているんだ？けれど……まったく息が合つてない。お互いに文句を言い合いながら戦っている。喧嘩してる場合じゃないんだと思うんだけどな。まあ、今の2人では喧嘩せずに戦えつて言うのは無理か。

ん？

八幡「あつぶねっ!？」

響・奏「八幡!？」

あの怪物、レコードを飛ばしてきやがった。やはりレコードの怪物と言うだけあつて、レコードで攻撃してくるのかよ。白ネコはそんな2人にこう言った。

白ネコ「2人の心合わせて戦うにや」

そう言われて何とか合わせようとするも、全然噛み合っていない。とりあえずオレはどつかに隠れるか。それから何度も合わせようするが上手くいかない。白ネコにネ

ガトーンと言うやつは世界を悲しくさせるといふ。あの2人があの怪物を倒さないと世界は悲しくなるらしい。だから息を合わせて戦うにやと。それを聞いた2人はアイコンタクトする。そして2人は怪物に挟み撃ちで攻撃しようとするも、避けられてしまい、2人は木にぶら下がっている状態になってしまった。

八幡「あちゃー」

やはり今の2人では無理そうだな。

響「ホントどんくさいんだから」

奏「何？私のせい？」

そんな事を言っていると2人の変身は解除してしまった。そんな姿を見た黒ネコ笑っていた。友達なんて口だけねと言つて怪物と男3人組と一緒にどこかへ去つてしまった。

響「あの、八幡」

八幡「あ？」

奏「助けて」

つたく……。降りれねえのかよ。

第2話

八幡 side

あれから2人を何とか木から下ろすことができた。そして今は思い出の場所でオレと響と奏、そして白ネコと宝石達で話していた。

ツーン状態の2人は間を開けているとはいえ、並んで座っている。そんな2人から少し離れたところに座るオレ。というかオレいる必要あるのか？

響「奏、運動神経無さすぎ」

奏「そう思うのなら助けてよ」

響「助けたじゃん。奏助けるのに忙しいからやられたちやつたんでしょ。私1人だつたら絶対勝つてた」

今もこうして絶賛ケンカ中である。すると白ネコがこつちにやつてきた。

白ネコ「2人とも仲良くするにや」

八幡「なあ、気になってたんだが、このネコなんだ？」

ハミイ「ハミイだにや。怪しいもんじゃないにや」

白ネコはクルツと回ってオレの方を見ながらハミイと名乗った。

八幡「いや、怪しく無いって、言ってる奴が1番怪しいって知ってる?」

ハミイ「2人と同じ事を言ってるにや。3人は仲良しにや?」

そう言われるとオレを含めた3人は黙ってしまふ。

八幡「…さあな」

ハミイ「にや?」

響「そ、それよりもなんで私達いきなりプリキュアになっちゃったの?」

響が誤魔化すようにしてハミイにそう聞いた。今のは内心ナイスと思っってしまった。

さっきのはちよつと答えずらいからな。

ハミイ「それは、2人の心の中に同じ印があつからにや」

奏「印?」

ハミイ「ハートマークがついたト音記号にや。キュアモジューレに変わったにや」

響「キュアモジューレって」

奏「これの事?」

2人は制服のポケットからさつき変身する時に使ったアイテムを取り出す。なるほど、あれはキュアモジューレというのか。

ハミイ「そうにや。それはプリキュアに変身するアイテムにや。だからあのト音記号

はプリキュアの印だったんだにや」

八幡「ほーん」

響「へえ〜」

ハミイ「あれは伝説の楽譜にあつた記号にや。だから伝説の楽譜を復活させる為には2人の力が必要なんだにや」

奏「伝説の楽譜って？」

オレもそれは気になっていた。なんなんだそれは？

ハミイ「むかしむかしから伝わる大切な楽譜だにや。その幸せのメロディーを歌つたら、世界は幸せになるにや。そして今年の歌い手に選ばれたのが、このハミイなんだにや」

奏「すごいじゃない」

ハミイ「まあにやは。でもハミイがモタモタしている間に楽譜が奪われちゃつたんだにや」

響・奏「「え？」」

八幡「笑顔で言うことではないだろう」

響「ハミイって結構天然？」

ハミイ「あ、ありがとうにや」

響・奏・八幡 「「褒めてないし（ねえよ）」」

なんなんだこいつ？

ハミイ「とにかくハミイとフェアリートーンは、人間界に散らばった音符を集めて、伝説の楽譜を復活させないといけないんだにや」

奏「そうしないとどうなっちゃうの？」

ハミイ「そうしないと、マイナーランドのメフィストという悪い王様が幸せのメロデーを不幸のメロデーに書き換えてしまうんだにや。そうすると世界の人々が不幸になってしまうんだにや」

響「そんなの…悲しい」

ハミイ「そうにや！だから早く音符を集めて、世界を救わなきゃいけないんだにや！その為には響と奏！2人の最高の友達の力が必要なんだにや！」

なるほど。大体わかった。けれど2人は俯いてしまう。そりやそうだ。今は2人の関係がギクシャクしているからな。そんな状態で一緒に戦える訳ないだろうしな。そして奏がゆつくりと口を開いた。

奏「私…友達かどうか自信ない」

…だろうな。

響「へっ!？」

ハミイ「なんでそういう事言うにや？」

八幡「それは2人は顔を合わせればケンカばかりしているからな」

ハミイ「にや？」

響・奏「……八幡」

八幡「ハミイも見ただろ。2人はプリキュアとかになってもケンカをしていたじゃねえか。そんな状態で戦えると思うか？」

奏「……八幡の言う通りだよ」

ハミイ「にや……」

奏「プリキュアになれたのは嬉しいけど、私きつと迷惑をかけるから辞退させていただきます」

ハミイ「そんな事言わないでにや」

ハミイは止めようとするが奏はそれを無視する。

奏「いいよねそれで」

そして奏は響にそう言った。……だが響は何も言おうとはしなかった。

奏「なんにも言ってくれないんだ。もういい！さよなら！」

そう言つて駆け出す奏。その時、響が奏で言った。

響「あのレコードどうするの？」

……レコードか。あれは2人の思い出のレコード。

響「あのレコードは私達の大切なレコードでしょ？」

奏「そうかもね……でも響言っただじやん。1人でも良いって」

確かにそう言ってたな。

奏「私がいなくても勝てるって。私達、もうあの頃みたいに親友には戻れないよ」

つ……そう……だよな。……くっそ……

響「それ本気で言ってるの？」

奏「本気だよ」

そう言っただけは走って行ってしまった。

ハミイ「奏……響……」

ハミイは響の方を向く。

八幡「別に良いんじゃないやねえの？」

響「っ！」

ハミイ「にや」

八幡「南野はやりたくないんだろ？ だったらそれで良いじゃないか。やりたくない相手に無理やりやらせるのもダメだろ。北条もそれで良いんだろ」

響「それは……」

響は答えられない。その原因の1つがさつき八幡が自分達の事を名前ではなく、苗字で呼んでいたからである。最初会った頃は苗字だったかもしれない。でも、途中からは八幡も響と奏を名前で呼ぶようになっていた。けれど、八幡は昔みたいになつてしまつたのである。

八幡「そうか。それがお前の答えなんだな」

八幡はそう言つて立ち上がつり、出口へと歩いていく。それを響は止めようとしたが、何故か出来なかつた。いくらでもできるはずなのに、何故か出来なかつた。そして八幡は調べの館から去つて行つてしまつた。

残された響とハミイ。ハミイは響と奏そして八幡の間に何があつたのか聞いた。

響「私達3人は1番の仲良しだったんだ」

ハミイ「八幡もかにや？」

響「うん、そうだよ。その時は奏と時々ケンカする時もあったんだけどね。その時に八幡は私達の間に入って仲を取り持ってくれたんだ」

ハミイ「そうなのかにや。はにや？にやらなんであの時そうしなかつたんだにや？」

響「それは多分私が酷いを言つちやつて、怒らせちやつたからかな」

ハミイ「そうなのかにや」

響「でも元はと言えば元凶であの日が来るまでは」

ハミイ「あの日？」

響「あれは中学の入学式の日。校門から3つ目の桜の木の下で、待ち合わせてたの。せーので一緒に入ろうって約束したんだ。でも、いつまでたつても奏は来なかった。信じられなかった。2人で約束したのに」

ハミイ「何か訳があったんじゃないかにや。約束を破る子には見えなかったにや」

響「でも奏は私を1人ぼっちにしたの。さつきだつてもう友達じゃないって、私を1人にしないでしょ」

ハミイ「でも悲しそうだったにや。奏だけじゃない。八幡も悲しそうだったにや」

響「っ！………ううん。もういいの。楽しかったあの頃にはもう戻れないよ」

八幡「ただいま」

と言つても誰もいないけどな。何故かと言うとオレは今一人暮らしをしている。別に家族から嫌われている訳では無い。ましてはネグレクトでもない。ちゃんと家族か

らは体調や健康面のことで心配してくれているし、時々テレビ電話をしている。でも親父が転勤になり、母ちゃん、妹の小町はそれについて行つた。オレはまだその時、響や奏と仲が良かった為、離れたくないと言つた為オレは今一人暮らしなのである。生活費や光熱費などを払ってくれているので、今も暮らしていけている。オレ一人の為、家事はもちろんオレでやるしかないのです、かなり身についていると思う。だから安心してください。

オレは一体誰に言つてるんだ？

さあてと晩飯何にするかな。すると電話が鳴つた。どうやらテレビ電話の様だ。オレは通話を押すと押すと画面に現れたのは、オレの母親だった。名前は比企谷舞。

舞『やつほー八幡。元気にしてる？』

八幡「ああ、元気だぞ母ちゃん」

舞『そう？なら良かった。ごめんね、たまにはそつちに行きたいんだけど、中々行けなくて』

八幡「別に無理して来なくてもいいよ。時間ある時に来てくれたらそれで良いから

「や」

舞『ほんとごめんね』

八幡「良いよ。今もこうして母ちゃんの顔見られただけでも嬉しいからさ」

舞『もう、嬉しい事言ってくれるわね。あ、そうだ。響ちゃんと奏ちゃん元気？』

八幡「っ！」

まさか母ちゃんからこんな事を聞かれるとは思ってなかったわ。

舞『最近どうかな？って思っちゃってさ』

八幡「なるほどな。……元気だよ。ほうz……響は相変わらず他の部活の助っ人をしてるよ。みな……奏はいつものようにスイーツを作ってるよ」

舞『そう、良かったわ。今度また会わせてよ。久しぶりに顔を見たいわ』

八幡「……そ、そうか。わかったよ」

果たしてその日が来るのだろうか。それは分からない。今もあんな感じなら無理だろう。それにオレは……あいつら2人とは……

舞『……ねえ、八幡』

八幡「な、なんだ？」

舞『なんかあった？』

八幡「……え？」

舞『なーんかあんた、暗い顔してるからなんかあったんじやないかなって、思っただけよ。あ、もしかして2人とケンカでもしちやった?』

いや……………ケンカなのかなあれは?でも2人とじやなくて2人がな。

八幡「別に……………なにもねえよ」

舞『ふーん、まあ八幡がそう言うのなら良いけど』

八幡「…」

舞『でも、母ちゃんはいつでも話聞くからね』

八幡「…ああ」

そう言つて母ちゃんは通話を切つた。

八幡「はあ…」

ほんとどうするかね。あの日からオレはあの2人と関わらなくなつたから、どう接すれば良いのかまったく分からなくなつてしまつた。くっそ! 一体どうすれば良いんだ。

ああ……………ほんと…昔に戻れねえのかな。

その後、色々考えながら晩飯を作つた。あんまり良い案が出ないまま、時間が過ぎていった。でもな…前みたいに話しかける事もできないだろうしな。まったくほんとどうすれば良いんだろなあ…………。母ちゃんも響と奏の顔を見たいって言つてたしな。

そして翌日。何も……浮かばなかった。

はあ……ほんとどうしたらいいんだろうな。ああ……母ちゃん、響と奏を会わせる事無理かもしれない。そう思いながら門を出ようとすると、3つ目の桜の木の下に1人の少女が立っていた。その時、響と奏のことを思い出す。アイツらがあなつた原因は、あの少女みたいに3つ目の桜の木の下で待ち合わせをして、一緒に門をくぐろうって言うてたな。でも確か響はずっと待っていたけど、奏は来なくて、遅れたらダメだから仕方なく門をくぐり校舎へ入ろうとした時、奏が他の友達と話しながら入っていくのを見たって言うてたな。もしかしたらこの少女は響達と同じ状況なのではないだろうか。いや、ただあそこにいるだけだろう。あ、そういえば向こうの方にもこっちと同じ桜の木があったような。オレの考えが合っているのであれば。そう思いオレは反対の門の方へと走っていた。

反対側の門に着くとそこには、響と桜の木の下にあっちの方で見た少女と同じくらいの子がいた。

八幡「……やつぱり」

ん？なにやら話しているみたいだな。ちよつと行ってみるか。

八幡「何してるんだ？」

響「あ、八幡。えつと……この子が友達と待ち合わせしているみたいなんだ。でも中々来ないらしいの」

なるほどね。というかその話響と奏みたいだな。すると響は少女に声をかける。

響「大丈夫だよ。友達はきつと来るよ」

少女「ううん！来ないよ！ずっと待つてるもん」

まさに響達みたいだなホントに。

「どこで待ち合わせたの？」

すると後ろから声が聞こえる。聞き覚えのある声だ。それもその筈だ。小さい頃からよく聞いていた声だ。声のした方を見るとやはりそこには奏がいた。

響「奏！」

八幡「南野……」

何故ここに奏が？今はスイーツ部の活動中では？そんな事を思っていると奏はオレ達の方へ近づいていき、少女に再び問いかける。

奏「ね、待ち合わせしたのはどこ？」

少女「3つ目の桜の木」

響「じゃあここだね」

少女「うん」

てことはやはり向こうの方にいた少女は……

奏「ねえ、ちよつと来て」

そう言つて奏は少女の手を引こうとする。

響「ダメだよここで待ち合わせしてるんだから」

だが奏は響の言うことを無視して少女の手を引き走つていく。

響「もう！なんなのさ！」

八幡「良いから行くぞ。お前にとつても何か分かるかもしれないしな」

響「それはどういう……」

八幡「ほら、早くしろ。置いていくぞ」

響「あ、ちよつと待って！」

そしてオレ達は反対側の門に到着する。

少女「あ、こつちにも桜並木」

奏「そう、そして1本、2本、3本目」

門から3本目の桜の木に着くと、そこにはオレがさつき見た少女がいた。

少女「あ、れなちゃん！」

れな「ありさちゃん！」

ありさ「ここで待つててくれたんだね！」

れな「うん、来てくれてありがとう」

その光景をなんとも微笑ましい光景だった。そしてそれを見た響は……

響「奏、もしかして入学式の日」

そう問いかける。

奏「うん」

奏もそれに対して頷いていた。

どうやら、お互いの誤解は解けたみたいだな。そう……つまり2人はこの少女達のように別々の門の桜の木の下にいたんだ。それでお互い会えなかつたんだ。

「何それ！」

こないいい時に後ろからそんな声が聞こえた。振り返るとそこには昨日の奇妙な服の3人と黒ネコがいた。

黒ネコ「友達ぶっちゃってさ。私そういうの大っ嫌い！ネガトーン！」

そういうと昨日見たレコードの怪物が現れたのだ。

黒ネコ「聞かせなさい！不幸のメロディーを！」

黒ネコの指示すると、怪物は謎の音を発し始めた。それにすごい風のような振動波のようなものも発した。それは聞いたこともない音だった。すると、突然周りにいた生徒達は頭を抱えながら苦し始めた。近くにいた少女2人は手をつなぎながら泣いて倒れ

てしまった。その少女達に響と奏は駆け寄っていく。

黒ネコ「なっ、なんであんたは平気なのよ！」

八幡「知るかよそんな事！」

オレだって知りたいよそんな事。響と奏は無事なのはプリキュアだろうと思っただけだな。

黒ネコ「ちっ、ネガトーン！あいつを攻撃するのよ」

八幡「なっ！」

響・奏「八幡！」

ヤバイヤバイ！というかなんでそういう発想になるんだよ！ただ、他の人と同じ様にならなかつただけで。動きたくても動けなかった。なんでだ！何故動かんオレの足!?! そんな事を思っているとネガトーンという怪物はオレに照準を定めた…その時だった。

「やめるにやー！」

そんな声の上から聞こえてきたのだ。まさかこの声は…と思いを上げると、空から白いネコ、ハミイが飛んできたのだ。

黒ネコ「ハミイ！」

ハミイ「やめるにや」

黒ネコ「あんた邪魔よ！」

そう言つて、黒ネコはハミイを突き飛ばしたのだ。それをオレはすかさずキャッチする。

八幡「大丈夫か？」

ハミイ「ありがとにや、八幡」

そしてハミイの視線は響達の方へ向けられる。

ハミイ「響、奏。ネガトーンと戦つてにや。世界を不幸のメロディーから守れるのはプリキュアだけにや！」

そう言われて2人は少し見詰めあつた後、少女達へ視線を向ける。

響「この子達。お互いをずっと待ってたんだ」

奏「うん、ずっとお互いを信じてた」

響「こんな優しい子達に悲しみの涙を流させるなんて」

奏「うん」

響・奏「絶対に許さない！」

2人はキュアモジュールを手につつと、フェアリートーンがそれぞれのキュアモジュールにはまる。響にはマゼンタのような色のトーン。奏には白色のトーンが。そして…

響・奏「レッツプレイ！プリキュア・モジュールショー！」

そして2人は昨日見た姿に変わった。

響「爪弾くは荒ぶる調べ。キュアメロディ！」

奏「爪弾くはたおやかな調べ。キュアリズム！」

響・奏「届け！2人の組曲！スイートプリキュア♪！」

そして変身した後、響は奏に聞いた。

響「本当の事教えて。あの日、入学式の事」

奏「うん、私ももう1つの校門で待ってたの。3つ目の桜の木の下で。でも、響が来なくて」

響「そうだったんだ」

奏「うん。響は向こうで待っていてくれた」

響「奏はこっちで待っていてくれた」

八幡「どうやらお互い違う門で待ってたって事だな」

響・奏「八幡……」

八幡「やつと……やつとだな。長かったなあ……」

奏「ごめんね八幡」

響「私をごめん」

八幡「良いつて」

3人はお互いを見つめあっていた。そんないい雰囲気を目撃した。そんないい雰囲気を台無しにするかのようにして、黒ネコことセイレーンは口を開いた。

セイレーン「いつまで友達ごっこやってんのさ！ネガトーン！」
おっと、どうやらやばくなってきたな。

八幡「この子達は任せろ。だから頼んだぞ…響…奏」

響・奏「っ！……うん！！」

オレは倒れ込んでしまった少女2人を少しこの場から離れた。これなら少しは安心してアイツらが戦えるだろう。

響「ねえ、奏。あの日の約束覚えてる？」

奏「もちろん！せーので一緒に学校に入る！」

響「じゃあ行くよ」

奏「うん！」

そう言つて2人は手を繋ぐ。それと同時にネガトーンはレコードを2人目掛けて飛ばしてくる。

響・奏「せーのー！」

掛け声と共に大きくジャンプをして攻撃を躲す。昨日とはうって変わって息もピツタリだ。そして2人は飛んでくるレコードを手を繋いだまま全て躲しきり、学校の屋根

へと着地する。それを見たセイレーンだったか？あいつは3人の内1人の頭を引っ掻いていた。おいおい、ハゲてしまうぞ。

響「やればできるじゃん」

奏「まあね」

ホント、息ピッタリだな。それに2人はお互い笑顔を向けている。ああ……昔の事を思い出すよ。それを見たオレは自然と笑を浮かべていた。

奏「ねえ、これから私と一緒に戦ってくれる？」

響「もちろん！今の私達、バツチリ息あつてるし。行こう奏！」

奏「今は奏じゃないよ」

響「え？」

リズム「キュアリズム！」

メロディ「そっか！行くよ！リズム！」

リズム「おっけーメロディ！」

そして2人は同時にネガトーンに蹴りをするが避けられてしまう……がすぐさま2人はジャンプをしてネガトーンにパンチの挟み撃ちを食らわした。そして2人でネガトーンも投げ飛ばしてしまう。昨日と違って攻撃も与えられるようになってる。

メロディ「行くよリズム！」

リズム「おっけーメロデイ！」

2人はステツプを踏み、お互い手を鳴らした後、手を強く握る。

メロデイ・リズム「プリキュア・パツシヨナートハーモニー！」

すると金色の閃光波のようなものが発射してネガトーンにぶち当たる。すると、ネガトーンから黒い煙のようなものが出る。

ネガトーン「ネ、ネガ……」

え？寝た？と思ったたらネガトーンはネガトーンになる前の状態、つまり思い出のレコードに変わったのだ。

ハミイ「やったにや！やっぱり2人は最高の友達にや！」

するとハミイが両手で手を鳴らすとレコードから、ピンクのような色をした音符が出てくる。そしてその音符はフェアリートーンの1つの中に入ってしまった。すると、苦しんでいた人達が元に戻っていく。それを見たセイレーン達は覚えときなさいとか言って、どこかへ去っていった。

その後、オレ達は調べの館で取り戻したレコードを聞いていた。

奏「響ごめんね。入学式の時一人ぼっちにしちゃって」

響「ええっ!? 奏が謝るだなんて」

八幡「響、お前結構失礼な事言ってるぞ」

奏「そうだよ響！」

響「うっそ嘘。私も勘違いしてごめんね」

奏「うん。それと」

2人の視線はオレの方へ向けられた。

響「改めて言うね。八幡、私達を仲直りさせようとしたのに、私酷い事言ってしまった。だからごめん」

奏「私も、酷い事を言っちゃってごめん」

そう言つて2人に頭を下げられる。

八幡「……オレもその…あの時は言いすぎた。………すまん」

響・奏「うん！」

こうしてオレ達はまたあの頃のように戻れたと思う。

ハミイ「うんうん。本当に良かったにや」

奏「ハミイ、私やつぱりプリキュアやってみるね」

ハミイ「にやはは！うんにや！」

そう言つてハミイは奏に手を差し出した。いや足なのか？まあ、どっちでも良いか。奏は差し出された手をに握つた。すると……

奏「やーん肉球！この触り心地完全にツボ！超テンション上がっちゃうー！」

ハミイ「ちよつと奏どうしたにや？」

ハミイは何か奏の手から逃れる。

奏「あ、ごめん」

響「ししっ、見ちゃつたし」

奏「なっ！／＼／」

響「肉球マニアだったなんてね？八幡」

八幡「ああ、まさか奏にそんな一面があつただなんてな」

響「みんなに教えなきや！」

八幡「程々にしろよ」

奏「もう！響ー！八幡ー！」

響「うおっと、逃げるよ八幡」

八幡「はいよ」

奏「あつ、待ってー！」

その後、オレと響は奏に追いかけて回されましたとき。

でも、またこうしてこの2人と仲良くできて本当に良かった。